



Osaka Gakuin University Repository

Title	ダイアログへの道――教育学徒の内界巡礼―― My Way to Dialogical Studies: A Pilgrimage to one Educational Theorist's Inner World
Author(s)	井上 専 (INOUE MAMORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 21 巻第 1 号 : 37-56
Issue Date	2010.06.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ダイアローグへの道 —— 一教育学徒の内界巡礼 ——¹⁾

三十路より 自らの方途^{みち} 探りしが これぞそれやも 今踏み出せり

井 上 専

My Way to Dialogical Studies: A Pilgrimage to one Educational Theorist's Inner World

INOUE MAMORU

ABSTRACT

What lead some people to write their autobiographical works ? One of the most important factors is seemingly that they'd like to make other persons and themselves understand better how and why they have come to their present thoughts or standpoints by narrating their processes of lives. Because a person often feels it difficult to recall his/her process of life vividly and objectively enough, while he/she is in the midst of fighting with one or another important problem in his/her life, autobiographical descriptions seem to be often written in his/her somewhat peaceful time, for example, in his/her old age or a "lull" in his/her life.

-
- 1) 本稿の内容全体からおわかりのように、表題に含まれる「ダイアローグ」という文言はもちろん対話調で叙述するという、筆者の叙述スタイルのことを主に意味しているが、これに象徴されるような、自分自身の問題意識や文章スタイルを優先させて探究を行うという、探究姿勢全体を表している。叙述の主要な時期は、筆者が研究と教育に専念しはじめた30歳から現在に至るまでである。なお、年代や時期の区分は必ずしも厳密を期しているわけではないが、10年間を序盤・中盤・終盤と分けする場合の、序盤とはおよそ0、1、2、3年の頃を、中盤は4、5、6年、終盤は7、8、9年の頃をそれぞれ念頭に置いている。

This paper also represents my autobiographical description which narrates how I discovered the significance of writing style in the study of educational anthropology and lately came to express my studies by means of dialogical writing style. The whole description consists of three periods , divided according to the characteristics of my studies.

From the early years to the middle years of my 30's, I used to study more various kinds of thinkers than my student days, while feeling uneasy, because I sometimes found some conflicts between their thoughts and contents of my own life.

From the last years of my 30's to the early years of my 40's, I gained more reflections about the contents of my life, but I couldn't find the suitable writing style and didn't have enough courage to express them.

From about the middle years of my 40's, I daringly began to express my own reflections by means of dialogical writing style, finding that this style was much more suitable to express what I wanted to express than monological style. In this way, I continue reflecting and writing with a kind of satisfactory sense till now.

The whole description of this paper itself is written in a dialogical style.

・プロローグ——ある喫茶店にて——

「今日の同窓会は思った以上にくつろげたよ。随分久しぶりに会う人が多かったから、会う前は少し不安もあったんだ。竹本さんはどう？」

「本当ね、守井君。それなりの工夫を凝らせば各自が楽しめることがわかったわ。お陰で、若い頃の自分にひととき戻れたような気がするわ。」

「同感だね。」

「ただ残念なのは、守井君の研究の様子について十分詳しく聞けなかったこと。どのようなテーマに関心があるのか、学生時代や大学院生の頃の様子は大よそわかるけど、それ以降の30歳前後以降から最近のことは、ほとんど窺い知ることができないんですもの。」

「えっ、そういう話にも関心があったの？気がつかなかったよ。」

「あっという間に時間が過ぎてしまったのも原因だけど、もしあまりに専門的な言葉がたくさん出てきたらどうしよう、と気後れして言い出せなかったのもあるわ。」

「平易な言葉でも、話せる内容が全く思い浮かばないではないけど……。でも正直言って、こちらも心配や、逡巡に似たものを感じないと言えば嘘になるね。」

「どうして？」

「だって僕の専攻の性質上から言っても、研究の話をするれば、どうしても僕の内面世界や、そこで繰り広げられた山あり谷ありのドラマもありのまま見せるようなことになる予感がするんだ。そうなると、なんとなくきまりが悪いのではないか、そんなことがふと頭をよぎるんだね。」

「まさに守井君の内界探訪となるわけね。とても大切な場所を訪れるという意味では、内界巡礼になるのかしら。ただ、どこまで話してくれるかは守井君にまかせるから、よかったら話せる範囲で話してみてくれない？」

「それでもいいかい？若い頃に返ったような今の気分と、眼前に座る関心に満ちた聞き手の助けで、普段より一層率直に語れる気もするね。」

「それはよかったわ。あ、でもその前にほら、飲み物が来たわよ。」

「それではひとまず、あらためて乾杯ということで。」

1、やりがいと不安のなかでの模索

—— 30歳代中盤まで、自分の生涯と他者の思想との間^{ほごま} ——

「30歳の頃を今振り返ってみると、まず思い浮かぶのは、やりがいを抱いて様々な事柄に活発に取り組んでは、模索している自分の姿だね。」

「どのようなやりがいかしら？」

「研究室で先生や先輩のアドバイスを仰ぎながら学ぶことがメインだった20代の頃に比べて、正式に大学で職を得たこのころは、自分の判断や裁量に任せられる場面が増えたことも一因だと思うんだ。研究者としてスタートラインに立ったばかり、あるいはまだほんの『駆け出し』とは言え、自分が『一人前』と見られつつあったからとも思うわけだね。」

「それならわかる気がするわ。守井君とは、職種も社会に出た年代も違うけど、はじめて社会に出ると、自分に任せられることが増えて『自分で物事に取り組んでいる』という実感が、学生の頃とは格段に違う気がしたもの。そこにやりがいを感じたりもしたわ。」

「僕の場合、研究の点で言えば、これまで学んできた思想家に加えて、自分が興味をもつ思想家や著作をこれまで以上に広く自由に学ぶ環境に身

2) 筆者が20歳代終盤から30歳代中盤にかけて参加した、一つの研究サークルは、これまで以上に広く多様な思想家の著作に触れる点でも、自分の観点を前面に打ち出して探究する人々と出会ったという点でも大いに意味が感じられるものであった。主要な参加メンバーたちによる成果の一つは、矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界：「物語ること」の教育学』（世織書房、2003年）に表されているが、筆者がこの書物への執筆をめざしつつもこれをなし得なかった事実には、以下でも話題になるような、当時の筆者の探究の状況、つまりいかに納得ゆくものを綴るかを巡る試行錯誤ぶりの一端が表れていると思う。

またこの時期の別の研究会の折に、20歳前後年長の先輩数人と会う機会があったが、このとき「先輩は今どのような思想家を中心に研究されているのですか」というこちらの問いかけに対して、それらの先輩の一人からうかがった言葉、すなわち「今では他の思想家というよりも、自分の考えや人生を中心に取り組んでいるよ」という趣旨の言葉は、筆者にたいして、なにか大きな「宿題」のような意味合いをもってそれ以後も心に残り続けたのを記憶している。

を置いて、このことに随分とやりがいを感じて取り組んだのを覚えているよ²⁾。ほら参考の為、いつも持ち歩いている研究のリストのこの部分を見してくれる? ³⁾」

「どれどれ・・・、なるほど本当ね。30歳代中盤までは、何か守井君が多様な思想家やテーマに精力的に取り組んでいる様子の一端がうかがえるわ。」

「こういう他者の思想を学ぶ一方で、僕の場合人生という点でも自分にまかせられる部分が大きくなったでしょう? 研究室と住居の間を往復するだけでなく、一層日常生活への密着度が増してきて、自らの判断や裁量で自分の生涯の模索も任せられるようになった。子どもが一人、二人と増えてきたのもこの頃だしね。」

「それも、わかる気がするわ。」

「自分の生涯がよりよく、より充実したものになるためにはどうしたらいいだろう、そのための不可欠な要件はどういうものだろう。こういう探究にもそれなりのやりがいを感じて活発に取り組み始めた頃だね。」

「いわゆる人生探究のことね。確か、守井君の専攻する『教育人間学』の分野って、自分の生涯のありようも、なんらかの形で探究の素材や内容と関係するわけかしら。」

「察しが早いね。『教育人間学』と言う場合の『人間』には他ならない自分も含まれていて、少なくとも学問と自分の生涯が全く無関係ではいられ

3) この時期の筆者による研究上の主な業績は、「教育学における『対話』とその今日の課題」(『大阪大学人間科学部紀要』第21巻、1995年)、「森 昭における『教育』と『人間生成』 - これからの教育学を考えるために -」(『大阪学院大学国際学論集』第7巻第2号、1996年)、「『体験』のダイナミズムと教育学的理解—ディルタイ『体験』概念を中心に」(『大阪学院大学国際学論集』第9巻第2号、1998年)、「上田薫の教育人間学—問題解決・動的バランス・人間生成」(皇紀夫、矢野智司編『日本の教育人間学』玉川大学出版部 1999年)、「物語りの人間学的考察—昔話を中心に—」(『大阪学院大学国際学論集』第11巻第2号、2000年)である。また、最終的な検討・完成作業は比較的最近のことだが、W. ディルタイによる『シュライアーマッハーの生涯』(上巻)三章分の翻訳にも、この頃かなりのエネルギーを注いでいた。(『大阪学院大学国際学論集』第18巻第2号、2007年、同論集 第19巻第1号、2008年、同論集 第19巻第2号、2008年参照)。

ないわけだね。あらためて強く専攻を意識しなくとも、これまで学んだ他者の研究の成果を下敷きにして生涯の試行錯誤に乗り出して行き、この探究の成果は知らず知らずに自分の中に蓄積されていくわけだね。」

「言わば、心のノートにメモして、そのメモが増えてゆく、そのようなイメージをすればいいのかしら。」

「そうそう。ただ、こうして全体としてはやりがいを感じて、研究生活と、生涯の探究生活を往復しているとき、ふとした合間に漠然とした不安のようなものが胸をよぎることがあったのを覚えているんだ。」

「それはどのような不安なのかしら。」

「それは、取り組んでいる他者の思想に、自分の生活がすぐには収まり切らない、両者がそぐわないと感じることに関係していたと思うんだ。」

「具体的に言えばどういうこと？」

「いくつかの例を出せば、例えば、『信、信仰』の問題にも、自分なりに探究してみた内容が積み重なってきたし、あるいは、屈託のない自分の子どもと過ごしていると、自分の生活にとっても『遊び』的な要素って大いに大切だなあ、と実感しはじめたのもこの頃だね。」

「なるほどね。それなら、同窓生から伝え聞いていた守井君の生活の様子からも、わかる気がするわ。」

「こういうテーマを、もっと細やかに叙述してほしい、あるいはこういう側面を注目してもらいたいと思っても、なかなか思ったような思想に出会わない。」

「それでは、そのような他者の思想の学びは守井君にとっては、さほどの意味がなかったということかしら？」

「20代に学んだO.F.ボルノーも含め、他の思想家の学びが無駄だったとは決して思わないよ。むしろ、今の僕の血となり肉となっていてと思う。でも、せつせと他の思想家に学べば学ぶほど、その内容と自分が日常生活で探究している内容が、十分にはかみ合わないという齟齬感が浮き彫りになることがしばしばだったんだね。」

「でもそれなら、他者の思想を守井君独自の視点で継承・発展させるとか、多様な人の思想を守井君の視点から総合するとか、そのような道はな

かったのかしら？」

「例えば、この二つの文章では思い切ってそのように試みた記憶があるのだけど⁴⁾、一方では他者の思想をいくらか強引に解釈したなという気持ちと、では自分の本当の観点を十分にさせているかということ、こちらにも不十分さを感じられて、結果に対してどこか本意な気持ちが残ったんだね。」

「なかなか、簡単にはいかなかったのね。守井君の感覚からすれば、他者の思想研究と自分の人生探究の『二足のわらじ』を履いて、なんとか折り合いをつけようとしてもなかなか上手くゆかない、そういう感じかしら。」

「本当にそう言えるように思うね。でも、この時点では『二足』を『一足』にして、自分の生涯とそこでの経験や省察を前面に打ち出して提示するような、具体的な手立てが思い浮かぶわけでもなく、全体として十分な自信がない状態だったようだね。」

「うーん、そうなの。」

「研究者の『一人前』とは、もしかすると自分なりの生涯の内実を前面に打ち出すことかもしれないのに、このような『どっちつかず』の状態は、いつまでも続くのだろうか。それでもよいものだろうか？このようなわだかまりのようなものを、折々にふと感じたわけだね。」

「不安とおおよそそのようなものとイメージが湧いたわ。でも、守井君の今日の表情を見ると、そのような不安や迷いのようなものはあまり感じられなかったわ。」

「おや、そうかな。自分では気づかなかったけど。」

「もしかすると、今では随分とそういう不安から脱して、吹っ切れた状態なのかしら？」

「確かに、最近ではそういう心境がないわけではないけど……。まずは一度見てもらうのが一番かな。比較的新しい文章も幾つかもってきたか

4) 注3に挙げた「森 昭における『教育』と『人間生成』 - これからの教育学を考えるために」、 「物語りの人間学的考察 - 昔話を中心に -」には、この試みの跡が比較的顕著に見受けられる。

ら、よかったら大まかに目を通してみてよ。」

「わかったわ。でもお茶を飲みながらでもかまわない？」

「もちろんだよ。」

2、ダイアログ調との出会い、これにまつわる葛藤

—— 40歳前後、表現をめぐる暗闘 ——

「へえー、『異国体験』、『信ずる・信仰』、『カラオケ』、『ちょいわる的遊び心の発揮』とか、なかなかおもしろそうな内容が含まれているわね⁵⁾。学生時代や今日の様子から言っても、確かに守井君の関心や人となりの一面と重なり合うようなテーマね。」

「そうかな。こういう個別のテーマを掘り下げる文章を積み重ねることで、ゆくゆくは僕なりの人間のイメージが自然と髣髴としてこれば、と今では思っているわけだね。」

「へえー、そうなの。」

「では、文章の理解しやすさという点ではどうだろう。僕の経験が前面に出ているからと言って、理解できない、それどころか支離滅裂という印象を受けるでしょうか？」

「守井君の経験がメインになっている点には多少のインパクトを受けるけど、理解不可能とか支離滅裂という印象はないわね。」

「それはよかった。君のそのような印象の一因を推量すると、僕以外の多くの思想家が賛同的にせよ批判的にせよテーマとしていたり、その視野

5) ここで念頭においているのは、筆者による以下の文章である。「異国に住むこと、人の成長——スイス・ヨーロッパをめぐる一つの対話（1）」——（『大阪学院大学国際学論集』第19巻第1号、2008年）、「異国に住むこと、人の成長——スイス・ヨーロッパをめぐる一つの対話（2）」——（『大阪学院大学国際学論集』第19巻第2号、2008年）「キリスト教と人間形成——『安らぎ』をめぐる一つの対話——」（平野正久編著『教育人間学の展開』北樹出版、2009年）、「『カラオケ』を大学で活用することの意味——体験的实践からの緒論——」（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第1号、2009年）「教育人間学とその文体について」（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、2009年）

のもとで探究していたりする内容がなにほどここの文章にも生きているからだろうね。」

「どういうことかしら？」

「例えば、個人と個を越えたもの（社会や世代）、多様性と同一性、知ることと信ずること、日常性と非日常性、理性と感性、シリアスと遊び、美的なるもの、超越的な大いなるもの、などなどだね。」

「ああ、そういう割となじみ深い観点が確かに文章の要所、要所に見えているわ。」

「こういう観点で経験がされ、そしてこの内容の表現にかなっていると僕が感じているから、その観点が文章に出ていると思うんだ。」

「そういう観点を私にもなにほどこ守井君と共有しているってことかしら、少なくとも全く理解不可能という印象をもたないのは。」

「そのように思うね。他の思想家を学んだことは、僕の血肉になっていて、無駄ではなかったということの一例かとも思えるね。」

「そこまではわかる気がするわ。ところで、今見ているこれらの文章は、年代的にかなり最近のものようだけど、守井君は先の話しに続く30歳代の終盤頃の時期から、順次このような感じで文章を発表して行ったわけよね？」

「実を言えば、すぐにそのようにはならず、30歳代終盤から40代序盤、つまり40歳前後の時期は、文章の業績という点では『ブランク』の時期だったわけだね。」

「えっ、そうなの？それは、よほど思わぬ大きなことが守井君に降りかかって研究ができなかったのかしら。まさか他のことに精を出しすぎて、研究の方がお手すきになったんじゃないでしょうね。」

「あの、この間も研究、授業、日常生活などそれなりに忙しく活動していたよ。でも原因は、例えば忙しさという外的な要因でなく、むしろもう少し研究に内在するものだったように思うよ。」

「それはどういうことかしら。」

「この時期も、意義あると感ずる生涯上の経験を自分なりに積み重ねて、書きたい内容やそこに込めるメッセージもかなり頭のなかでは固まってき

てはいたと思うんだ⁶⁾。でも、いざそれを表現し綴ってみようとするとなにか壁のようなものにつかって、越えようにも越えられないでいた、つまり『表現』ということがらに関係する壁につかっていたというのが正直のところだね。」

「この時期にもそれなりにドラマがあったよね。はっきり言えば、それはどのような壁だったわけ？」

「それは、文章のスタイルそのもの。この対話調という文章スタイルのことだね。」

「確かに少し個性的な文章だなんて思ったけど、この文章様式にそんなに重要さがあるわけかしら？」

「一般に言って、私たちは文章で綴る内容や性質の方には目がいても、それを綴る文章のスタイルには目がいきにくいでしょう？」

「そう言われればそうかしら。」

「でも、文章の内容や性質と適合した文章スタイルがあってこそ、十分納得をもってそれらを表現できると思うんだね。このことに気づくまでには相当な紆余曲折があったように記憶するよ。」

「確かにこの文章に書いてあるわ⁷⁾。守井君の生活スタイルや書きたい内容が、独話調よりも対話調のほうに一層適合しているわけね。そう言えば、守井君は学生時代から対話の問題に取り組んでいたのを思い出したわ⁸⁾。」

「対話というテーマ自体は、若い頃から大切な問題だったから、とくに意識しなくても生活のベースに作用していたと見えるね。この問題に今度は、内容を綴るときの文章スタイル、そして執筆のときの姿勢・態度という方面から出会ったようだね。」

「なるほどね。でも、具体的にその頃の状況はどのようなものだったの？」

6) 以前から関心があった異国体験を積むことができたのもこの時期である。

7) 注5に挙げた「教育人間学とその文体について」参照。

8) 主に「言語における世界と自己の形成」(卒業論文、大阪大学人間科学部提出、1986年)、「ボルノーにおける対話論」(修士論文、大阪大学大学院人間科学研究科提出、1989年)を指す。

「僕もそれまでは独話調の、しかも論説調でしか綴ったことがないから、ほとんどこれが壁とも気づかずに苦労したんだ。つまり、まずは取り組みやすそうなテーマから綴ろうとしては中絶して、未完に終わってしまう。では、別のテーマはどうかと取り組んでは、同じ結果になってしまう。」

「守井君にとっては十分相手がわからないという意味では、『見えない壁』にぶつかっただような心境かしら。でも、学者さんの文章というと、やはり一人の人物が自分の研究内容や主張を論説調に綴るのがオーソドックスというイメージがあるから、無理もないという気はするけど。なにか、先人の文章に学んだとか、少なくともヒントはなかったのかしら。」

「例えば、論説調でなくとも随想（パスカル『パンセ』）、小説（ルソー『エミール』）、戯曲（ゲーテ『ファウスト』）、書簡（ペスタロッチ『ゲルトルートはいかにその子らを教えるか』）、告白文学（ルソー『告白』）、警句（ニーチェ『人間的な、あまりにも人間的な』）などが試みられているようだね⁹⁾。そのときどきで、思想家が自分の人間についてのイメージやテーマを表すのに適した文体を試みていて、相当な程度で成功してるようだね。」

「対話調と言えば、学生時代に少し読んだプラトンの著作は対話調で綴られていた覚えがあるわ。」

「よく気がついたね。ただこのときは、そのような他者の先例に学ぶというより、随分と長い間文章を綴れていなかったから、とにかくやってみるしかない、というような無我夢中で、またいくぶん冒険的な気持ちで対話調を試みたということが正直なところだね。」

「それで、その効果はどうだったの？」

「これが思った以上に大きかったと思うよ。壁が少しずつ動くかのように、ほとんど止まっていた筆がようやく、少しずつ動きはじめたんだから。」

「へえー、よかったじゃない。でも『少しずつ』ということが少し気になるわ。その後はすぐに飛躍的に進展して、順風満帆のような状態になったわけではないの？」

9) 言うまでもなくこれらの例は、数ある思想家とその著作の多様な文体のうち、ほんの一部を挙げたにすぎない。

「ハードルは一つだけでなかったようだね。当時は先の壁を越えられそうなお手応えを相当感じつつあったけど、この壁を越えようとする途上で、このことと並行するようにもう一つ壁が現れたんだ。」

「おやまあ、今度は一体どんな壁なのかしら。」

「内容の点でも、その叙述スタイルという点でも、文章として自分の独自色をこれほど前面に出すのは初めての経験でしょう？」

「それは、今までの話からもわかるわ。」

「だから、これが周囲の同僚の先生方や同じ分野の研究者の人たちにものように受け取られるか、その心配や不安がしだいに募ってきたんだね。語るには少しきまりが悪いけどね。」

「私の知り合いの研究者の人からも、そもそも文章を綴るのには相当なエネルギーを費やして、精魂込めて取り組むって話を聞いたことがあるわ。不眠不休で綴ることもしばしばあるって。」

「分野によって違いこそあれ、きっと大方の研究者がそういう経験をするとするよ。そうして綴った成果を、今度は白日の下にすることは、いつでもある種の不安が伴うから、それを振り払うにはある種の思い切りが必要ようだね。」

「それは、私も想像がつくわ。公表された文章をきっかけに、反論や論争が巻き起こることがあるわけでしょうから。」

「自分が文章を公表して、実際に立ち直れないほどの反論や批判を受けたような記憶はないにせよ、もしそうなったらどうしようという心配がたびたび頭をよぎったわけだね。」

「守井君の先程の文章を見ても、まさに守井君自身の経験世界が、内面も含めて綴られているって感じだから、それを表現し公表することには勇気があることは私でも想像できるわ。」

「暖かい言葉だね。当時の心境を例えて言えば、他者の考えという盾を頼りに、ときどきは自分の顔をのぞかせて独自性という剣を出す、といった経験しかない剣士が、今度は全くそういう防具なしで真剣での戦いに出てゆくようなものだったように思うね。少しおおげさかもしれないけど。」

「いいえ、上手い例えかもしれないわ。大よそのイメージがわくもの。」

「たとえ仮にこの文章が完成したとしても、果たしてこれを公表するだけの勇気が自分にはあるだろうか、そんな不安がちらつくと、折角動き出した筆もふたたびスピードが鈍って、何度も気分が萎えがちになった記憶があるよ。」

「完成させて自分の言い表したいことを公表したいという意欲と、その勇気が十分がないという気持ちの間で悶々としていた状況はわかってきたわ。」

「この頃は大きく見て、このような二つの壁と格闘していたわけだね。少なくとも当の本人は、表面上は普段と同じ生活を続けようと努めていたわけだから、この格闘は表面下での格闘、つまり『暗闘』と言えるかもしれないけど。」

「なるほど。守井君は、そうして人知れず表現をめぐる暗闘を繰り返していた、こう言いたいわけね。」

「でも実を言えば、ある観察眼の鋭い人から見れば当時の僕は、ふと屈折のあるような、どこか煮え切らないような表情をのぞかせていたようだよ。その人の言葉で言えば、ときに『いじいじした』ような印象を感じさせたそうだから。」

「あら、これは手痛い言葉ね。例えて言えば、自分の親に対して本当は何かを大きな声で伝えたいけど、他の人がいる手前言い出せない子どもが、やきもき、もじもじしている感じかしら。」

「はは……。あの、それも決してうれしくない例えだけど、きっとそれにも似たような心境だったかもしれないね。」

「でも、それだけの葛藤がある状態から、文章を完成させて公表するまで踏み切れたのはなぜかしら？何か背中を押されるようなきっかけがなければ、そのように踏み切れない気がするのだけど。」

「思い余って、理解ある先生に相談したこともあったけど、最も大きかったのは、やはり自分自身をよく省みるなかで浮上してきた一つの問題意識で、これにのっかって最終的には自分で決断したということだね。」

「へえー。もう少したずねたいところだけど、私そろそろ甘いものも食べたくなったわ。」

「君も？では、何か注文してみようか。」

3、新たな励ましを受け、ひとあしずつ

—— 40歳中盤から、未踏の地に行く ——

「ところで、守井君がさっき言っていた問題意識ってどのようなことなのかしら？私のイメージだと、一つ一つの文章を綴るときでも問題意識って大切なわけでしょう？例えば、自分はこのテーマ、この点は大切だと思うけど、どうも十分着目されていないとか、この面にもっと光をあててもいいのではないかとか。」

「そう、そういう問題意識は個々のテーマを綴る文章の推進力としても大切だと思うんだ。そのような問題意識を仮に『小さな問題意識』とよんでみると、このときの僕の問題意識は個々のテーマについてというより、そういう個々のもの全体に関わるような、『大きな問題意識』と言ってもいいね。」

「果たして、その『大きな問題意識』とはいかに？」

「つまり、自分の生涯の『刈り入れ時』が次第に視野に入ってきたのに、『一人前以前』なのか『一人前』なのかどっちつかずの状態でよいものか。いや、これは大いに問題かもしれない、そういう問題意識だね。」

「いよいよ、お話も佳境に入ってきた雰囲気ね。でも、どうしてそういう心境になったのかしら。」

「ほら、竹山さんでも若い頃はいろいろな他者のお世話になりつつ、わりと気楽に模索ができる面があるとしても、もう若いと言える時期を通過したあとは、そろそろ本当に自分独自の集大成のようなものが気にならないわけではないでしょう？」

「それはそうね。意識では若いつもりでも、社会で働いていて『現役』と見なされる年代という点でも、そろそろ円熟期というか、独自の成果も眺めるべき『刈り入れ』の時期が視野に入ってきたと感ずるわ。」

「僕の場合は、活躍していた思想家や先輩・先生がそろそろ一般に『第一線』と見なされやすい年代を通過したり、あるいは不幸にも亡くなるこ

とに直面したりしたことも一因として働いていたように思うね¹⁰⁾。」

「わりと切実な問題としてわかるわ。自分もそろそろ先輩たちに『お世話になる』だけではだめで、自分自身の色の花をさかせないと、そんな気持ちにふとなるもの。」

「そういう思いが募ってきたとき、実にこれまでのようなどっちつかずの自分が、ふとあるひな鳥のイメージと重なってきたんだね。」

「えっ、どのような鳥なの？」

「身体も成長し羽根も生えそろって、もう自分の羽根で飛べる、いや飛ばなくてはいけないのに、いつまでも親鳥の巣の中に座っては、大きく口をあけて餌をねだっている、そんな鳥だね。」

「ふふ、少し滑稽なイメージだけどわからないではないわ。いつまでも自分が他者から受けることを期待している感じね。」

「いままでの自分はこのような姿勢だったかもしれない。もしそうなら、これではいけない。そういう思いが募ってきたんだね¹¹⁾。」

「それが、40歳代の中盤の頃なの？」

「大よそそうだね。どこまで飛べるのか、そしてどういう軌跡を描くのかはわからないけど、とにかく自分の羽根で思い切って羽ばたいてみよう。そういう思いで対話調の文章を完成・提出し、研究会や学会でもこれについて発表をはじめたわけだね。」

「ついに、踏ん切りをつけた、腹をくくったというわけね。本当によかったじゃない。なにかこちらも安堵に似た気分だわ。守井君の比較的最近の出来事ということもあってか、臨場感が伝わってきたわ。」

「そう言ってもらうと、こちらもうれしいよ。」

「ところで、守井君。ここまでの話が、対話調の文章へ向かう行程という意味で『ダイアログへの道』だとすると、これ以降守井君は『ダイア

10) 身近な親類・縁者の老いや死という事象に出会う機会が増えたことも、少なからず要因として働いていたと思う。

11) ここで話題になっている研究者の「一人前」とは、もちろん生涯にわたる課題であるだろう。しかし、そこに向けて歩を踏み出すのと、そうではないのとでは大きく違うというのがここでの趣旨である。

ローグの道』を歩み始めたということになるわね。」

「まさしくそういうことになるね。」

「それで、『ダイアローグの道』の歩み具合はどういう感じですか？軽やかに歌でも歌って楽々へ行けるような道なのかしら？それとも、『いばらの道』のようであまりに困難だから、後悔のあまり来た道をもう一度引き返そうと思っているとか？」

「自分にとって『未踏の地』と言えるものに踏み出したわけだから、これまで以上に『ただ独り』を感じたり、いままでにない風圧のようなものを生活全般で感じたりする機会が増えたのは事実だね。」

「そう、楽なだけではないわけね。」

「でもこのように踏み出してみた結果、これまで知らなかった新たな励ましを受ける経験もできて、このお陰もあって、やってみてよかった、つまり『然り』という心境で、ひとあしずつ歩めている。これが実情のように思うね。」

「へえー、新たな励まし？では、どんな励ましがあつたのでしょうか？」

「多分竹本さんも、自分がとても意欲が湧く仕事に存分に打ち込んだ後って、疲労感を覚えても、納得感や充実感を伴った疲労感だという経験をしたことあるでしょう？」

「それはあるわ。自分をもっとも出したいものを出し尽くして完全燃焼した、って感じがするように思うわ。逆に、意欲がさほどわからない事柄に、多大のエネルギーを費やさざるをえなかった後の脱力感のようなものはない気がするし。心なしか、疲労がながびかない感じもするわ。」

「僕も幾つかの文章を書き連ねるなかで、それと同種の経験を、文章を綴るということでも経験して、それが新鮮な発見だったんだね。」

「文章を綴るときの労苦が、以前より少なくなったわけではないの？」

「きっと文章を綴るさいの労苦という点では以前と変わらないのではないかな。少し説明すれば、まずは外的環境だけを言い訳にせず、新たなテーマを綴る決心をしてその態勢に入るのに一苦勞。」

「それから？」

「頭のなかで考えてあつたり、メモしてあつたりする大まかな論点・流

れをもとに序盤を書きはじめては書き直し、中盤まで進めては書き直し、最後まで進んでは全体をまた修正する。こういうことを、通常は何度も何度も繰り返すわけだね。」

「やはり大変そうね。でも・・・、と続くのでしょうか？」

「よくわかるね。大変であっても、ここにはこちらが描きたい場面やそこに込めたメッセージを描ききれたという充実感と一種の感動、そして、これで自分自身の、ささやかであっても一つの足跡をこの世に残せたという達成感が伴うんだね。そればかりか、綴っているうちにこれから表現したい別のテーマが思い浮かぶことが少なくないから、時が来れば次の一歩、また次の一歩も踏み出したいという夢も膨らむわけだね。」

「へえー、努力を補って余りある、という感じかしら。新たな励ましってそれだけなの？」

「こういう文章を公表して、この文章に関連した内容を研究会や学会で発表してみたときにも、新たな発見があって、ここから励ましを経験している、そう言えると思うよ。」

「それは、守井君の考えや文章スタイルがすぐに受け入れられ、賛同を得たということ？」

「いや、むしろ疑問や質問が多く出たように思うね。」

「ここでも楽なだけではなかったようね。そこで、大きなダメージを受けることはあったのかしら？」

「確かに、困惑することはよくあるにせよ、自分にとって『致命傷』と呼べるほどのものとはあまり思えないね。こちらにもそれまでにない耐性、堪える姿勢が生まれているということだね。」

「どういうことかしら。」

「例えば、質問や疑問が、こちらの視野内にあってもまだ十分言葉で答えられないものについては、どう答えられるかじっくり自分の観点から考えてみようと思えるし、視野外のものについては、ゆくゆく機会があればその質問・疑問が人生で重要であると感じられる範囲と程度で取り組んでみよう。少なくとも背伸びをするように自分の柄にあわない議論に飛び込んで行って、言わば他流試合を行なうようなことは避けよう、という心境

になれて、必要以上に攪乱されることが少なくなったと実感するんだ。」

「そう言われると、ふと『軸足が定まった』対応という表現が思い浮かんだわ。」

「そう、ある足を軸足にすることは、他の足を軸足としない、という点では、自分はオールマイティーではないと自己を限定することだけど、自分をもっともやりがいを感じ、だから一番力がある『軸足』を定め、そこに重心を置いた上で、多様なことに対応するのと、『軸足』が最初からぐらぐらしているのでは大きく違う、これも新たな発見であり、励まされたね。」

「職種は違うけどわかる気がするわ。自分が勝負したいし、勝負できるところで戦うという姿勢のようね。」

「もう一つの発見は、これまでの自分にとっては『学ぶ』、あるいは『仰ぐ』対象になりがちだった、先人や先輩の思想家の気持ちがこれまで以上に身近になったという点で、これも新たな励ましとなっているね。」

「それは、どういうこと？」

「それらの人々も、自分と同様はじめから大きな足跡を残そうとして、つまり並外れた業績を目指して自分の仕事に専心したのではなくて、あくまでも自分のテーマや問題意識にもとづく『私だけの道』を歩み続けたのではないか。あるときは意気揚々と、あるときはとぼとぼと。そう思えるんだね。」

「なるほど、それで？」

「いろいろな逆風に出会ったとしても、くじけて放棄したり、もと来た道を再び引き返すことなく自分の道をひとあしずつ歩みつづけた結果、その思想が年々深さと広さを獲得していったのではないかと。」

「その深さと広さのために、結果的に内容的にも多くの人々に共鳴を呼び起こしたってということかしら¹²⁾。」

12) もちろん思想家によっては、別の思想家の継承・発展の面が顕著に見られる人もあるが、この人にしては他者の『亜流』や『二番煎じ』に甘んずることのない、自分自身の明確な探究姿勢がベースにあってこそ、真の継承・発展者になれたにちがいない、というのが筆者の考えである。

「そう。結果はそうでも、当の本人としては他者が賛同してくれるかはわからないし、仮にほとんど賛同者がいないとしても、それどころか生前には世に認められないとしても、自分が与えられた能力や環境をもって、もっとも納得のゆく仕事をしてこそ最善のものを提示できるし、そしてその結果、たとえ一度も会った事もない誰か一人の人間の生に共鳴を呼び起こし、その生をなほどこか鼓舞することができるならば、これはプレゼントのような望外の喜びだ。少し極端に言えば、そのような姿勢だったのでないだろうか、と。」

「うーん、なるほどね。そういう意味では、それら先達の人々が遠い存在ではなくなり、むしろ同じフロンティアの気持ちをもった『同胞』のような共感を感じられるようになってきた、そういうことかしら？」

「自分で言うのもためらうけど、それに似た気持ちだね。こういう発見にも励まされて、自分にとって未踏の地を、ひとあしひとあし歩ませてもらっている、こう思うわけなんだ。」

「なにかわかる部分が少なくないと感じるのは私だけかしら。でもほら、話に熱中しすぎたようで、そろそろお互いアイスクリームが溶け始めたようよ。」

「おや、大変だ。」

・エピローグ

「君のお陰で、普段は人に言いにくいことも割と率直に語る事ができた気がするよ。まさに『よい相手は、一層よい語りを生む』といった心境だね。」

「私にとっても意味の感じられるひとときだったわ。やはり、とても大切な守井君の内面世界を訪れるという意味で、内界巡礼をしたような心持ちすらするわ。」

「それは過分かもしれないけど、うれしい言葉だよ。君と語り合うことで、今取り組んでいる文章の骨子が一層見えてきたようだね。」

「えっ？まさか、このような内容で文章を綴る予定があるの？それって、

言わば自叙伝に近いわよね。」

「そういうことになるね。最近では自分史っていう言葉で呼ばれ、これに似たものもさかんに行われているようだね。」

「でも、自叙伝や自分史って、自分の人生全体を振りかえられる年代、つまり比較的晩年の時期に著すというイメージがあるわ。」

「おや、そうだろうか？これまでの自分の歩みに一段落をつけて、ある新しい心境で一步を踏み出した人がそこに至る経緯を語ることで、自分の立場をクリアーに表明したり、時には周囲に弁明したりする文章もあるように思ったけど。それに、仮にたとえ先例がほとんど見当たらないとしても……。」

「……大切だと思えばぜひとも敢えてやってみたい、どうしてやってはいけないんですか？そう言いたいわけでしょ。」

「はは……、わが意を得たりだね。それはともかく、今日は本当に有難う。」

「いえ、こちらこそ。近々また機会があればお会いしたいわ。そのときまで守井君、どうぞお元気で。」

「竹本さんの方こそ。」